

保育職の初期キャリアにおける危機と専門的成長

Study on the early career crisis and the professional development of nursery school and kindergarten teachers

谷川 夏実¹, 柴崎 正行², 金田 卓也², 酒井 朗², 田代 和美²

¹家政学研究科人間生活学専攻, ²人間文化研究科人間生活科学専攻

キーワード：新任保育者，省察，危機，成長，問題状況のとらえ方

1. 研究の目的

本研究の課題は、保育職の初期キャリアにある保育者の危機と危機を契機とした専門的成長のプロセスを解明することである。特に新任保育者に着目し、成長をとらえる枠組みとしての省察プロセスのあり方について新任期の危機や状況をふまえて考察する。

先行研究において、保育者の成長は経験の積み重ねとともに保育者の力量が漸次的に上昇していくような熟達モデルを前提として分析されてきた。しかし一方で、津守（2002）は保育者の子どもへのかかわりの1つとして省察を挙げ、保育の実践は省察を含めた営みであり、実践と省察は切り離すことができないと論じた。また、吉村ら（1997）が明らかにした保育者の「実践と省察の螺旋的省察連続過程」は、保育実践における省察が保育者の成長に欠かすことができない営みであることを示唆している。

このことは、保育者の成長を熟達モデルでとらえることの限界と、保育実践に即した保育者の成長の枠組みがあることを意味しており、省察モデルに基づく保育者の成長プロセスすることが研究的視点としてきわめて重要であると言える。

また、これまで保育者は小・中学校の教員と比較して勤務年数がきわめて短いことが度々指摘されてきた。調査結果（Benesse 次世代育成研究所 2009）においても、経験年数が5年未満の若手保育者が全体的に高い割合を占めることが明らかになっている。この結果は、定年まで勤務し続ける保育者よりも就職してから早期に退職する者が多く、経験年数の短い保育者が全体の大きな割合を占める保育現場の実態を浮き彫りにしているといえるだろう。

こうした実態は、若手保育者の質がわが国の保育の質を大きく左右しかねないことを示唆している。つまり、いかにして若手の保育者を育成し、

成長を育むことができるかという課題の検討は不可欠である。

以上の保育を取り巻く現在の社会的状況をふまえ、本研究では検討を要する課題として次の2点を設定した。すなわち、1つ目は省察モデルによる保育者の成長プロセスの検討の必要性、2つ目は若手保育者の育成のあり方を検討課題とした研究の必要性である。1点目の課題については、保育者の「省察」プロセスに着目し、2点目の課題については、若手保育者の中でも特に危機的状況に陥りやすいとされる保育職の初期キャリアにある新任保育者に着目することとした。

保育者の省察をテーマとしたこれまでの諸研究については、省察プロセスの解明を重視しているものの、保育者の成長を分析する概念として省察をとらえる視点は弱く、省察と成長の関連を解き明かす知見の積み重ねはきわめて少ない。しかし、このプロセスについての理解がなければ、保育者のキャリアに合わせた「省察的实践家」像に基づく保育者教育・支援を構想する際の論点を示すことはできない。

そこで本研究では、保育者の成長を読み解くキーワードとして省察概念を用い、保育者の省察プロセスの解明を試みる。

2. 活動実施報告

調査の対象は、4年制の保育者養成校を卒業した新任保育者10名（全員女性）である。

調査方法としてはインタビューを採用した。保育者となった4月より、月1回のペースで対象者1名に対して1時間から1時間半の半構造化インタビューを実施した。調査は現在も継続中であるが、本報告書では保育者1年目の4月から2年目4月までの1年間のデータについての分析を行った結果を示す。

分析の手続きは、インタビューデータに基づく

概念、カテゴリーの生成および結果図の作成において修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下 2003)の手続きを参考に行った。インタビューで得られたデータに基づき、時系列ごとに語られた内容の中から繰り返し見られるエピソードに対して内容の解釈を行い、解釈の意味を表現する概念名をつけ、生成された概念を意味のまとまりに基づいてカテゴリー化し、カテゴリー相互の関係を検討した。その結果に基づき、カテゴリーと概念の相互関係を示す全体図を作成した。

以上の手続きにおいて新任保育者の保育実践における問題状況のとらえ方とそれにもとまう実践に取り組む姿勢の変容プロセスに着目し、新任保育者特有の省察プロセスのあり方について検討を行った。

本報告書で示すのは、対象者の中から他の保育者との語りの内容に最も多くの重複がみられる公立幼稚園 3 歳児クラス担任 A さんを分析対象者として選択し、分析を行った結果である。

新任保育者へのインタビューデータを分析した結果、問題状況のとらえ方の変容プロセスを構成する 6 のカテゴリーおよび 34 の概念が生成され、実践に取り組む姿勢の変容プロセスにおいては 5 のカテゴリーおよび 16 の概念が生成された。これらのカテゴリーおよび概念の相互関係に基づく新任保育者の省察のプロセス図を作成した結果、問題状況をとらえる視点が変容することを転換点として、実践に取り組む姿勢が質的な変容を遂げるプロセスが示された。

教師と同様に保育者は、保育者として就職したその日から新任もベテランも関係なく責任を担う。しかし、担任として何をすべきかということを手取り足とり教えてもらうのではなく、実践に取り組む中で自ら学んでいくことが求められる。したがって、入職直後は担任として子どもとかかわるという初めて直面する状況に、ただただ混乱しているという状況である。そのような段階を経て、具体的に取り組むべき課題としての【自分が主語から子どもが主語へ】というテーマが立ち上がることが、新任保育者の実践を【行きあたりばったりの実践】【業務的な実践】から【解釈に基づく実践】へと質的に変容させることが明らかとなった。

3. 研究目標の達成状況

本研究の実施計画においては、新任保育者だけで

なく様々なキャリアの保育者へのインタビュー調査および収集したデータの分析を予定していた。しかし調査実施段階において、新任保育者の調査についてより詳細なデータを収集することの必要性が生じた。そのため今年度の調査においては、新任保育者についてのデータ収集およびデータ分析が調査の中心的課題となった。したがって、対象とする保育者のキャリアが限定的になり、本研究の課題である初期キャリアにある保育者の全体像をとらえるにはデータのヴァリエーションが少なくなったことは実施計画に対して達成できなかった点である。この点は今後取り組むべき課題としたい。

4. まとめと今後の課題

本調査では新任保育者の危機を契機とした専門的成長をとらえる枠組みとして省察に着目し、新任保育者の省察プロセスの検討を行った。その結果、新任保育者の省察プロセスのあり方は、【何をするにもいっぱいいっぱい】【自分ができないことが見えて苦しい】という困難な状況をくぐり抜け、【自分が主語から子どもが主語へ】問題状況をとらえる視点が変容することを転換点として、実践に取り組む姿勢が【行きあたりばったりの実践】【業務的な実践】から【解釈に基づく実践】へと質的に変容することが明らかとなった。

今後の課題は、新任保育者の省察プロセスの精緻化を図ることである。これまでの研究期間において対象者 10 名のうち 1 名についての分析を行った。他の対象者についても同じように分析を行い、対象者によって省察プロセスのパターンに違いがあるのか、違いがあるならばその違いは何によって生じているのかということについて検討し、新任保育者の省察による成長のプロセスを提示したい。

また、新任保育者以外の若手保育者についてさらにインタビュー調査を行うことにより、初期キャリアにある保育者の危機と成長の全体像をとらえることを目指す。

5. 研究成果

1) 学会発表

[1] 谷川夏実. 新任保育者の省察プロセスに関する考察. 日本教師学学会第 13 回大会. 早稲田大学. 2012. p. 26-27.